

# 民具の利用価値を掘り起す

## はしかけ「近江はたおり探検隊」の結成

民俗学部門担当 学芸員 中藤容子



復元製作した新しい地機に座る筆者

後世に残す民具を  
どう活かす？

琵琶湖博物館には、県内各地で収集した昔の生活用具、民具を数千点収蔵しています。これらのほとんどは昭和53年から17年間かけて滋賀県教育委員会が収集したものです。ときおり収蔵庫を訪れる研究者は「こんなものが近江にありますか」「これは中世の姿を残したものだ」などと驚きの声をあげます。収蔵庫の中は宝の山なのです。

こうした民具収集は、文化財保護行政の下、全国各地の地方自治体で行われました。しかし、財政難もあってか、収集後の整理が進まなかったり、維持すらできなくなるところもあると耳にします。私は、全国に収蔵される宝の山が失われていくかもしれないことに危機感を感じ、「民具の利用価値の再発見と実践」を研究テーマに掲げて取り組むことにしました。

体験学習などの場で民具が実際に使われることでその利用価値を引き出す実践は、近年着実に増えています。老人医療と連携して、老人が民具を使うことで痴呆をケアする回想法という療法も注目されています。しかし、収蔵庫にある民具は後世に残すことを目的としています。消耗したり壊れたりしてはならないのです。研究者に見ていただいたり、展示公開するくらいしかできないのでしょうか。

### 資料展「糸を紡いで布を織る」をきっかけに

そう思いをめぐらせていたころ、3回目の民俗資料展の準備が始まりました。今回のテーマは「機織り」。バラバラの部材から組み立てた機が数台あって、これを展示したいと思つたのです。特に、江戸時代の墨書のある踏板つきの地機は全国的に見ても珍しく、近江ならではの逸品です。しかし、どうやって織るのかよく分かりません。実際に織ることはできないかと思つていたら、あるはしかけさんが「これくらいなら僕でも作れますよ」と声をかけてくださいました。(はしかけさんとの

出合いについては本誌前号の特集記事を参考にしてください。)そこでピンと思いついたのが、博物館に収蔵する民具をもとに、新しいものを復元製作し、動きを再現して、みんなで体験するという方向性でした。資料展の副題に「民具の復元・再現・体験」に加え、はしかけグループ「中世のおんなたち」と共に、地機の復元製作をはじめ、今まで製作した布の作品展、機織りの実演、受講生を募り体験講座も開催することになりました。

資料展では120点以上の資料が展示されました。展示ケースにズラッと並び糸車や展示室中央に居並ぶ高機など、多種多様な木製の道具に多くの来館者が圧倒されました。そして「地機の復元・再現・体験コーナー」では毎週2回、体験講座の受講生とともに機織りの実演を行いました。余裕があるときは、来館者にも地機織りや綿織りを体験していただきました。地機の復元製作は、木工の得意な方が集まるケアクラフト002の力もお借りしました。

その製作風景をはしかけさんがビデオ撮影し5分ほどの番組に編集していただき、地機コーナーで流すことができました。また、はしかけグループ「体験学習の日」と協働して弥生機やよいばたの体験イベントも開催することもでき、資料展は平成16年4月23日から6月10日まで開催日数43日間、入場者数は1万5000人余りを数えました。

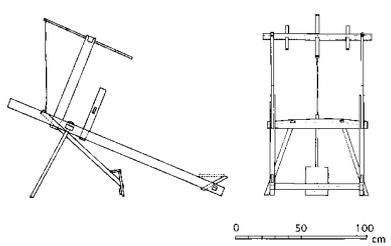
今回の展示には、実際に機織りの経験のある方や専門家が予想以上に多く訪れました。彼らとの交流の中で得た発見は数知れません。展示最終日には、展示していた地機の組み立て方の間違いを指摘され、組み立て直すという出来事もありました。こうした出合いの中で、近江の機織りに関する課題が明らかになり、それを探究していくためのネットワークが築かれていきました。

このように今回の資料展は、準備段階から開催中に至るまで、人々との出会いと交流の中で収蔵資料のもつ存在意義を

日々開拓する場となったのです。「近江はたおり探検隊」の結成へ

こうして資料展をきっかけに、我々の機織りをめぐる探究は深まることとなりました。体験講座の受講生の一部を新メンバーに加え、7月10日にははしかけグループ「近江はたおり探検隊」が結成され、機織り活動だけでなく、綿・苧麻の栽培、県内を中心とした地機調査や研究会なども行っています。

博物館は、単に個人に知識を広める場ではありません。考えるための本物の素材があり、さまざまな立場の人々の交流・協働の中で何かを創造していける場なのだと思います。この中でこそ、博物館に収蔵される民具の利用価値が発揮できるのではないのでしょうか。今回の資料展での実践を経て、こう確信しました。私は学芸員として、さらに民具の利用価値を掘り起こす実践を続けていくつもりです。



本館に収蔵する地機の実測図(修正版) シモバタ 野洲郡中主町六条 踏板の柄の側面に「弘化三年(1846年)の墨書がある

**県内の「地機」を探しています。**

「近江はたおり探検隊」の部会「地機探検隊」では、県内を中心に各地に残る地機の調査を行い、実測図の作成を進めています。今までの調査については、インターネットページで紹介しています。新しい地機の所在情報があれば、教えていただくとありがたいです。

**「近江はたおり探検隊」**  
[http://www.geocities.jp/weaving\\_expedition/](http://www.geocities.jp/weaving_expedition/)